

新学習
指導要領スタート!

算数

小学校の先生への メッセージ

子どもがどこに
つまづいているかを
見つけられる先生に!

見方・考え方は
子どもたちにとって
算数授業の救世主!

笠井 若い先生には、子どもがどんなことにつまづいているのかということをいっぱい見つけてほしい、知ってほしいと思っています。先生になる人は昔から優秀で、あまりつまづいた経験のない人になっていることがあるから、ぜひ、“実は分からない子どもたちがいっぱいいて、ひよんなことにつまづいている。”ということに気づいてほしい。“子どもってこんなつまづきをするんだ。”というところを見つけれられる先生になってほしいと思います。

つまづいている子のために、教科書通りに言葉で言っても伝わらない場合、どういうことを言ったら分かってくれるのだろう。図にしてみようとかか具体物を使ってみようかというように、その分からない子のために先生が何をしたら分かるようになるのかということを必死に考えること、このことをまず若い先生にはやってほしいと思います。

これから求められる先生像は、「子ども同士が学び合い、あることを見つけることができるようにする先生」です。先生は一步引いて、子どもがどんどんパフォーマンスをして、子ども同士が学びを進めていく授業にしていってほしいと思います。そのためには、先生が教えるときに使っていた具体物などを、早い段階で子どもに渡すなどして、子どもが具体物などを使って説明できる環境を用意するとよいと思います。



盛山 若い先生は、「数学的な見方・考え方を働かせる」って、難しそうに聞こえてしまうと思うのです。“どうやって見方・考え方を働かせる授業をすればよいの?”と思っているのではないのでしょうか。でも僕は、「見方・考え方を働かせる」という言葉は、子どもたちを救う言葉だと思っています。ある問題を解決することがなかなか難しい子どもたちにとって、“こういう見方をすれば”とか“こういう考え方をすれば”ということは、授業中のヒントになると思っています。

例えばそれは図で示したり、物であったりしてもよいと思いますが、答えや解き方を教えるわけではなくて、そこに至る前の見方を示すということです。「どこに着目すればいいのか」「こういうふうと考えたらどう?」ということは大きなヒントになります。この“見方・考え方は、子どもたちにとって授業の救世主だ!”と思っています。

それをうまく使って、“こういう数学的な見方をしたら問題がうまく解けた!”という感動を子どもたちに味わわせてあげてほしいと思っています。いつもならできなかった子が、ここまでのヒントがあったら“なるほど、できた!”っていう、授業中に“できたっ!”って歓声をあげるような、思わず立ち上がってしまうような子どもが一人でも二人でも増えたらいいなと思います。

